

企画2：書籍との出逢い

「諸学への誘い」科目の担当講師14名からの推薦図書28冊です。会場内に展示しています。手にとってご覧ください。（ ）は講師名。15時半まで展示。

①金出武雄
『独創はひらめかない』
日本経済新聞出版社（Kindleバージョン）

講演者の楽しく研究の経験を書いた気軽な読み物を楽しんでいただければ幸いです。
（金出武雄）

②G. ポリ著 垣内賢信訳
『いかにして問題を解くか』

丸善
スタンフォード大学の数学者 G.Polya教授による不朽の名著。特に、第III部のいくつかの例題からそこに含まれる命題を見つける発見的方法は 多くのデータを深層学習によって組織化できる現在においても、あるいはだからこそ科学者・工学者にとって重要な思考法とおもわれる。（金出武雄）

③ランドル・コリンズ [著]/井上俊, 磯部卓三訳
『脱常識の社会学：第二版：社会の読み方入門』

岩波書店
社会学の考え方の面白さを凝縮したロングセラーの入門書です。契約、宗教、権力、犯罪、結婚、AIといったトピックをめぐりながら社会学的思考に基づいた刺激的な議論が展開されていきます。ちなみに評者はこの本を学生時代に読んで社会学の面白さを知りました。
（粕谷圭佑）

④デイヴィッド・フランシス, スティーヴン・ヘスター著/中河伸俊 [ほか] 訳
『エスノメソドロロジーへの招待：言語・社会・相互行為』

ナカニシヤ出版
日常生活の作り上げられ方を研究する「エスノメソドロロジー」と呼ばれる学問の入門書です。私たちの日々の何気ない「やりとり」や「理解」がどのように成立しているのかを見通す視点が得られるはずです。（粕谷圭佑）

⑤ホセ・カレーラス
『自伝ホセ・カレーラス 奇跡の復活』

音楽之友社
白血病から奇跡的に回復し歌手として復帰したテノール歌手ホセ・カレーラスの自伝です。彼は今年で78歳を迎え現在も歌い続けている私の憧れの歌手の1人です。彼の音楽、人生との向き合い方に触れてみてください。
（水野亜歴）

⑥関 孝弘/ラーゴ・マリアンジェラ共著
『イタリア語から学ぶひと目で納得! 音楽用語事典』

全音楽譜出版社
事典としても、読み物としても面白い一冊。楽譜に書かれている音楽用語（イタリア語）をこの事典で調べてみてください。きっと新しい発見があるはずです。（水野亜歴）

⑦太田博太郎
『奈良の寺々』

吉川弘文館
奈良の建築を知るには、まずはこちらを。奈良時代はもちろん、つづく時代の重厚な建築の歴史がコンパクトにまとめられています。岩波ジュニア新書にラインナップされていた名著が、近年再刊されました。（鈴木智大）

⑧藤森照信・山口晃
『日本建築集中講義』

中公文庫
全国の名建築を笑いにまで昇華させてしまう一冊。建築史の研究室を選ぶ前、建築家を志ざしていた頃、藤森さんの言説にはまったのが、この道を歩むきっかけになったのかも。建築史の魅力は懐の広さにあり。（鈴木智大）

⑨奈良国立博物館
『特別展 大安寺のすべて
－天平のみほとけと祈り－図録』

出版社
2022年春に奈良国立博物館で開催した特別展の図録。考古学、文献史学、美術史学それぞれの立場の学芸員が選んだ作品を通じて、大安寺創建から現代に至る歩みをたどった内容。異分野の学問の協業により開ける世界は大きいです。（中川あや）

⑩奈良文化財研究所 監修
『新装版 平城京のごみ図鑑 最新研究でみえてくる奈良時代の暮らし』

河出書房新社
2015年夏に奈良文化財研究所平城宮跡資料館で開催した子供向け展覧会「平城京”ごみ”ずかん」の図録を元にした本。平城京の出土品の魅力を広めたい学芸員の熱意を詰め込んだ1冊で、大人にとっても楽しい内容になっています。（中川あや）

⑪高エネルギー加速器研究機構 素粒子原子核研究所 編
『宇宙と物質の起源 「見えない世界」を理解する』

講談社ブルーバックス
スーパーKEKB電子・陽電子加速器、J-PARC大強度陽子加速器を運用して素粒子・原子核についての研究を推進する高エネルギー加速器研究機構・素粒子原子核研究所がまとめた最先端科学のエッセンスを紹介する本です。（宮林謙吉）

⑫小林誠
『消えた反物質』

講談社ブルーバックス
粒子・反粒子の物理法則の違いを生む機構について益川敏英先生とともに理論的枠組みを与え、ノーベル物理学賞を受けられた小林誠先生がその核心であるCP対称性の破れについて解説した本です。（宮林謙吉）

⑬Jean Monnet（ジャン・モノ）
『Mémoires（回想録）』

Livre de poche
「欧州統合の父」ジャン・モノの回想録。“Nous ne coalisons pas des États, nous unissons des hommes”（国家の連合でなく、人々を結びつける）に統合の理念が表現されている。（橋田力）

⑭Paul De Grauwe（ポール・デ・グラウエ）
『Economics of Monetary Union（通貨同盟の経済学）』

Oxford University Press
（オックスフォード大学出版局）
欧州通貨統合に関する定番の教科書（和訳あり）。「危機の予見はできないが事後の説明はできる」と揶揄される経済学の例外がユーロ危機であり、当初から財政同盟を欠く通貨同盟の危険性を警告していた。（橋田力）

⑮網野善彦
『増補 無縁・公界・楽』

平凡社ライブラリー
「日本中世の自由と平和」という副題をもつ本書は、1978年に刊行され、日本史研究の枠をこえて大きな反響を呼びました。歴史を論じるとはどういうことかを考えさせてくれる問題作です。（西村さとみ）

企画2：書籍との出逢い

「諸学への誘い」科目の担当講師14名からの推薦図書28冊です。会場内に展示しています。手にとってご覧ください。()は講師名。15時半まで展示。

⑯F.W.ニーチェ著、秋山英夫訳
『悲劇の誕生』

岩波文庫

悲劇の「誕生」と「再生」を語る本書が日本史研究の参考文献に挙げられることは、ほとんどないでしょう。ただ私にとっては、学生時代に、こんなふうに日本における文化の創造を描いてみたいと思わせてくれた、大切な一冊です。(西村さとみ)

⑰大岡敏昭
『清閑の暮らし 隠者たちはどんな庵に住んでいたのか』

草思社

住宅史学の見地から八人の隠者たちの侘び住まいを再現。詳細な間取り図や、庭の風景など、各自のこだわりや美意識が視覚的にもたのしめる！
陶淵明・白楽天・兼明親王・慶滋保胤・西行・鴨長明・松尾芭蕉・良寛が残した詩、歌、句から浮かび上がった貧しくとも、自分の道を一心に究める、清々しい生き方。(坂井禎介)

⑱飛田範夫
『庭園の中世史 足利義政と東山山荘』

吉川弘文館

将軍であった足利義政は、混乱の政治をほったらかして、自分が引退して隠棲するための理想の住まいと庭を求めた。銀閣寺で知られる東山山荘の歴史を描き出す。(坂井禎介)

⑲山崎一雄
『古文化財の科学』

思文閣出版社

学生時代に最も影響を受けた一冊。日本を代表する古文化財科学的研究者の山崎一雄がその半世紀近くの研究成果をまとめた書籍。貴重な絵画の顔料分析、陶器・ガラスの科学分析、金属器の成分分析について、詳細に報告した書籍である。(青木智史)

⑳中井 泉(編)/日本分析化学会X線分析研究懇談会(監修)
『蛍光X線分析の実際 (第2版)』

朝倉書店

蛍光X線分析の原理や方法、試料調整、標準物質、解析法などを詳細かつ分かりやすく解説している。文化財の非破壊分析の具体例についても紹介している。蛍光X線分析を学ぶ上での必携の一冊である。(青木智史)

㉑マシュー・サイド Matthew Syed
『多様性の科学 (原題: Rebel Ideas)』

ディスカヴァー・トゥエンティワン

日本では理工系に女性が少ないことが一つの課題ですが、興味深いエピソードと共に多様性の重要さを考えさせる読み物。未だに「多様性を選ぶか、超一流になるかどちらかだ」というような考えが頭をかすめる方にお勧め。(塩崎 一裕)

㉒ジェイソン・ヒッケル Jason Hickel
『資本主義の次に来る世界 (原題: Less Is More)』

東洋経済新報社

科学者が知っておくべき資本主義の短い歴史。私たちはこれからどのような世界を目指すべきなのかを考えさせられる一冊です。読み終えた後、謝辞の最後の一文「疑問を持つことは、何より強力である」が心に残ります。(塩崎 一裕)

㉓J. インプリー、K.P. インプリー、著、小泉格訳
『氷河時代の謎をとく』

岩波現代選書 (1982年)

絶版となってしまっていますが、ありがたいことにAmazonの古本で入手可能な時があります。この本の内容は、最新の地球科学から見ても、まったく色褪せていません。我々に科学的発見の面白さを伝えてくれる名著だと思います。(高田将志)

㉔杉村 新
『大地の動きをさぐる』

岩波現代文庫 社会340 (1973年初版)

活断層の引き起こす内陸直下型の大地震が土地を大きく移動させ、そのような現象が過去に繰返し何回も発生して、身近な地形が形成されてきたことを実証的に、しかも小学生向けに平易に示した名著です。(高田将志)

㉕土井邦雄
『学長の回顧録 -在米40年、シカゴ大学名誉教授の波乱万丈研究人生-』

インナービジョン

コンピュータ支援診断 (CAD) 研究のパイオニアである著者の人生を、25回の連続テーマで構成した回顧録。論文の筆頭著者の扱い (9回)、ロングレンジ研究の重要性 (10回)、リーダーシップの重要性 (14回)、研究費獲得の心構え (16回)、学術研究の進め方 (20回)、感情能力の基礎概念 (21回)、類似画像のサイエンス (24回) など、現役の研究者あるいはこれから研究を志す人へのアドバイスがわかりやすく書かれている。(浅田尚紀)

㉖ロバート・カーソン
『46年目の光 -視力を取り戻した男の奇跡の人生-』

NTT出版

3歳の時事故で視力を失い、43年後に手術によって視力を取り戻した主人公マイク・メイの人生を描いた実話。この本を読むと、「目が見えないこと」＝「不幸」ではなく、「目が見えるようになること」＝「幸福」ではないことが理解できる。第12章「認識の重労働」以降は、視覚認識能力、特に脳の機能に関心のある人にとって興味深い内容になっている。(浅田尚紀)

㉗ミチオ・カク
『サイエンス・インポッシブル - SF世界は実現可能か -』

NHK出版

本書では、テレポーテーション、念力、地球外生命体、タイムトラベル、永久機関など様々な「不可能な科学」を取り上げている。第一版が書かれた2008年には不可能であったが、今は実現しているものもあるので、ぜひ読んでそれを見つけてほしい。(信川正順)

㉘小山 勝二・舞原 俊憲・中村 卓史・柴田 一成
『見えないもので宇宙を観る』

京都大学学術出版会

人類は「見える光 (=可視光)」だけでなく、「見えない光」である電波や赤外線、エックス線、最近では重力波を駆使して、新たな宇宙像を発見してきた。本書ではその醍醐味を味わうことができる。(信川正順)

メモ欄

メモ欄